

宮本輝

Teru Miyamoto

耕屋
物語

下





2000.10.15

物語星

工業学院图书馆
藏书章
宮本輝

下

Teru Miyamoto

彗星物語 (下)

平成四年五月三十日 初版発行
平成四年七月十日 再版発行

著 者 宮本 輝

発行者 角川春樹

印刷所 暁印刷株式会社

製本所 株式会社宮田製本所

発行所 株式会社角川書店



東京都千代田区富士見二―十三―三

電話 営業部〇三―三八一七―八五二一

編集部〇三―三八一七―八四五二

振替口座東京三一―九五二〇八千一〇二

落丁・乱丁本はご面倒でも小社通信販売課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えます。

©Printed in Japan

ISBN4-04-872707-9 C0093

彗星物語
(下)

装丁 装画
菊地信義 風間 完

第五章

1

ハンガリー政府が、ボラージュに許可した留学期間は三年で、それは残り一年となった。

ボラージュが城田家の住人となって丸二年がすぎたのだが、敦子は、ボラージュと自分たちのあいだに、数多くの摩擦^{まさつ}が生じ、それはもういまにも火を発して燃えあがりそうな気配であることを案じていた。

二年も一緒に暮らせば、日本人同士でも、どのみち、何等かの感情的な行き違いとか、考え方の相違による衝突は避けられないのだが、ボラージュとの問題は、もっと単純な、だからこそ逆に複雑さを持った形態にねじれて、解決策のない平行線へと変わってしまう。

ボラージュが、城田家の家族と融合^{きぶつ}していくにしたがって、敦子には理解^{りかい}しがたい些細^{ささい}ないざこざが絶えなくなったのである。

それは、彼が真に城田家の家族の一員になったという証拠でもあるのだが、そのために生まれ

る腹立ちや驚きは、敦子には、予想もしていなかったことだらけだった。

敦子が、最初にボラージュと衝突したのは、彼の異性問題に関してである。

ボラージュが修士課程に進んで半年ほどたったころ、敦子は、ボラージュに日本人の恋人が出来たことを知った。それも、ボラージュと日本人の女子大生が、肉体の関係を持つてすでに何か月もたつてから、敦子はやっと知ったのだった。

ボラージュの挙動を不審に思い、深夜、話し合う機会を得て問い詰めると、別段たいした問題ではないといった顔つきで、

「うん、彼女とつきあうようになって、もう半年ほどになるよ」

とボラージュは答えた。

「どうして、いままで黙ってたの」

敦子は多少気色ばんで言った。するとボラージュは、

「だって、それは多くの個人的問題でしょう」

と言う。その言い方に思わずかっとして、

「個人的な問題？　個人的な問題は、全部、秘密にしておくって言うの？　私もパパも、ボラージュが日本にいるあいだは、大きな責任があるのよ。そんな言い方はないでしょう」

と、敦子は言った。

「でも、ぼくがどんな女とつきあおうと、パパやママの責任じゃないでしょう？　ぼくはもうおとなで、相手もおとな。ハンガリーでも、ぼくには恋人がいた。だけど、その女を父や母に紹介するかどうかは、ぼくの自由。ハンガリーだけじゃないよ。ヨーロッパではみんなそうだよ」

「ここはハンガリーと違うの。ここは日本のよ」

「へえ、じゃあ、ぼくは、友だちが出来るたびに、パパやママに報告しなければならない？　日本人は、みんなそうするの？」

「友だちじゃないんでしょう？　何度も、その人とベッドをともにしてるんでしょう？」

「彼女は友だち。セックスをしたかどうかなんて関係ない」

「関係ない？　セックスをして、なんで友だちやのん？　それは恋人でしょう？」

「セックスをしても、相手によつて友だちの場合と恋人の場合とがあるよ」

敦子は、次の言葉が出てこなかった。ヨーロッパの男と女は、みんなそんな考え方なのだろうかと呆気にとられたのだった。

「そやけど、日本人の女は、そんなふうには考えへんわよ。相手の人は、ボラージュを自分の恋人やと思ってるわよ」

「それは相手の勝手な誤解。でも、相手の考え方までは支配出来ないよ」

「そんな自分勝手なこと、よくも言えるわねエ。相手が、ボラージュと結婚するつもりでいたら

どうするのよ」

「ぼくは、結婚なんてひとことも口にしてない。ぼくは、相手に〈好きだ〉とは言ったけど、〈愛してる〉とは言ったことがない。ぼくは、その人を好きだからセックスをした」

「じゃあ、愛してたら何をするのよ」

「セックスをするよ」

「何を言ってるのよ。ボラージュ、日本語が下手になったんと違う？」

「ぼくの日本語は、ほとんど完璧かんぺき」

「うぬぼれるんじゃないわ。好きでもセックスする、愛してもセックスする。じゃあ、どっちでもセックスするんじゃないの」

「でも、その人を好きだからセックスするのと、愛してるからセックスするのとは、ぜんぜん違う。前者はお互いの楽しみのため。後者は、愛情のため」

「何が前者で後者よ。どっちにしてもセックスはセックスなのよ」

「そう、ママの言うとおり。どっちにしても、たかがセックス。それなのに、ママはどうして、セックスをしたかしないかにこだわりますか？　たいしたことじゃない」

敦子は、怒りと同時に、いったい自分とボラージュのどっちが正しいのかわからなくなり、夫に相談しなければとうろたえつつ、ボラージュとの話を打ち切ったのだった。

敦子からその話を聞いた晋太郎は、翌日の夜、ボラージュを伊丹駅いなの近くの焼き鳥屋につれて行き、〈ここは日本〉であること、〈ボラージュのやり方〉は、日本人には通用しないことを説明したが、そのうち、敦子の数倍も腹を立てて帰つて来、

「そんなにプライヴァシーに干渉するなら、ぼくは城田家を出て留学生の寮で暮らしたいってぬかしやがつた。よくもそんなことが言えるもんや」

と怒鳴つた。

いったいどうしたものであらう……。敦子と晋太郎が頭をかかえているうちに、ボラージュとその女子大生の関係は終わった。なぜいとも簡単に終わったのか、敦子はボラージュに訊いた。

「わからない。たぶん、他に好きな男が出来たと思うよ」

とボラージュは、さして気にした様子もなく答えた。敦子はそれから二か月ほど、電話が鳴るたびに、その女子大生の親か兄弟からではないかと案じたが、それはなんと杞憂きゆうに終わったようである。

しかし、その一件以来、ボラージュは、しきりに〈自立〉という言葉を使うようになり、彼と晋太郎のいさかいは増えた。そして、冗談の使い方、電話のかけ方、煙草の吸い方等々、すべて生活のあらゆる部分で、ボラージュのやり方と敦子たちのやり方との相違が表面化したのだった。そうやって、ボラージュの、日本における最後の夏を迎えた。

目の病気が治って、再び天体観測に没頭している雄吉から手紙が届いたので、敦子は、福造に顔を見られないようにして家計簿をつけていた手を止め、封筒をあけた。

――前略、ごぶさたしています。みなさんお元気でおすごしのことと思います。

恭太も中学二年生になり、随分大きくなったことでしょう。もう道で出会ってもわからないのではないかと、しょっちゅう家内と話をしています。

めぐみちゃんの子供たちも、みなそれぞれ大きくなり、めぐみちゃん自身も、いつときの痛手から立ち直ったこと、自分のことのように嬉しく思っています。ぼくたちから見れば、どんなに大変な苦勞が伴なおうとも、子供がいるということそれ自体が、宝物に囲まれているみたいに感じられてなりません。

さて、きょう手紙を書いたのは、お姉さんにとっては少々ご迷惑になるかもしれないお願いがあるからです。

ご承知のように、ぼくたちの住む町は、四方を山に囲まれていて、子供たちのほとんどは、海を見たことはありません。教え子たちにせがまれて、ことしの夏、泊まりがけで海水浴につれて行ってやることを約束し、和歌山にいる大学時代の友人に無理を頼んで、民宿を取っても

りました。七月二十八日から三日間です。

ところが、行く予定だった子供のうちの四人が、バレーボールの県の代表に選ばれ、夏の強化合宿のために行けなくなっていました。和歌山の白浜の民宿は、もうどこも満員で、友人は知り合いを当たって、やっと二部屋取ってくれたので、いままら行けなくなつたとは言にくいし、せっかく取れた二部屋をキャンセルしてしまうのも勿体ないので、姉さんたち一家が行ってくれないかなアと考えた次第です。部屋代は、朝食と夕食付きで、ひとり一泊八千円です。料理がおいしいので評判の民宿だそうです。

何かと物入りで大変だと思いますが、ご一考下さい。この手紙が届いて三日目あたりに、ぼくのほうから電話をかけます。

蒸し暑い関西の夏が始まりましたが、みなさん、どうかお元気で。晋太郎義兄^{にい}さんに、くれぐれもよろしくお伝え下さい――。

首を振らなくなつた扇風機を修理しながら、

「雄吉さんは、何を書いてきたんや？」

と福造が訊いた。敦子は、手紙を封筒にしまい、小型の電卓を家計簿の上に置いて、

「恭太は大きくなつたやろとか、めぐみちゃんが元氣になつてよかったとか、まあそんなことや

ねエ」

と答えた。福造はドライバーで扇風機の部品を外してから、敦子を見つめた。

「へえ、そんなことを、わざわざ手紙に書いてきたんかいな。あの筆不精が」

敦子が、雄吉の用向きを福造に内緒にしたのは、福造の気性をよく呑み込んでゐるからだつた。ぶつくさ文句を言いながらも、家計のやりくりが苦しいことを知れば、福造は自分の預金をおろして、そつと敦子に渡してくれる。しかし、めぐみひとりの収入では、四人の子供を育てるには到底足りず、福造は、毎月、四人の孫たちに小遣いを与えている。

これ以上、年老いた義父に甘えてはいけなさと、敦子は思うのである。

「きのうの夜、ちよつとポラージュに意見してやつたで」

と福造は言つた。

「帰りが遅うなるときは、きようは遅うなるとか、きようは友だちの家に泊まるとか、電話をかけてこい。電話一本がかけれへんはずがないやろつちゅうてな」

「ポラージュは、どない言うてました？」

「電話のない場所にいてるときもあるとか、出かけるとき、ひよつとしたらきようは友だちの家に泊まるかもしれへんと、ママに言つてある。だから、帰つてこないときは、友だちの家に泊まつてると考えてくれたらええ。そない抜かしよる。それで、わしもかつとしてな、ようそれだ

け理屈が言えるもんや、つべこべ言わんと、電話をかけてこいって怒鳴った。そしたら、『ハンガリーでは』ときやがった。ハンガリーやろうが、ブラジルやろうがソ連やろうが、そんなことは関係ない。きょうは外泊するというのは、家族にそのことをしらせるのは当然や。わしがそない言うたら、黙って、部屋に引っ込んでしまひよった」

「私、もう疲れてしもた……」

と敦子は初めて福造にそう言った。

「習慣とか民族性が違う人と一緒に長いことひとつ屋根の下で暮らすことが、こんなに神経にさわるもんやとは想像もしてへんかった……」

その敦子の言葉に、福造はいやに余裕のある笑みを浮かべた。

「ハンガリーではこうするとか、ヨーロッパ人はこうするとか、屁理屈を抜かしよるのは、あいつの言い訳や。家族と一緒に暮らしていくうえでの最低の約束事は、どの国でもおんなじや。晋太郎は、なんでボラージュをもっときつう怒れへんのや。ボラージュが、日本に留学出来たのも、二年以上も日本で生活が出来たのも、みんな晋太郎のお陰やないか」

「俺のお陰やと、恩を売するような言葉は、ひとことも使いたうないんでしよう」

すると、福造は、元通り首を振るようになった扇風機の羽根を雑巾で拭きながら、

「ボラージュは、ほんまは、ものすごい気の弱いやつなんやで」

と言った。

「晋太郎も、そのことは充分わかつとるんや。そやから、ボラージュの言い草を、黙って聞いとるんやろ」

確かに、意外なくらいの気の弱さを、何かのひょうしに垣間見せるときがあるな……。敦子は、ボラージュの顔を思い浮かべて、そう思った。

「ことしの春から、毎月、奨学金を貰えるようになって、ボラージュがその気になったら、留学の寮に入れることになったやろ？」

と福造は訊いた。

「先月の末から、十七万円、貰えるようになったそうです」

と敦子は答え、夫がボラージュに、その金は使わずにハンガリーに持って帰るよう勧めたことも、初めて福造に打ち明けた。福造は手に付いた油を洗うために洗面所に行き、戻ってくると、意味ありげに笑みを浮かべた。

「そろそろ、晋太郎は、ボラージュの訓練を始めよるな」

「訓練？ 何の訓練？」

敦子は、暑そうに舌を出しているフックの耳の中をティッシュペーパーで拭いてやりながら訊いた。

「ボラージュが日本に着いて一か月ほどたったころ、晋太郎はわしにこう言いよった。『ハンガリーは、ほんとにきれいな国や。民族性も優れてるし、十七世紀から十九世紀にかけては、ヨーロッパの文化の先頭に立ったときもある。ぼくは、東ヨーロッパに大きな変革が起るとしたら、そのときはハンガリーが重要な役割を果たすと思う。しかし、日本の政府は、そんな先のことを考えたりせん。いつかハンガリーに自由が訪れたら、日本政府は、そのとき、日本とのつながりが薄いことに慌てよるやろ。ぼくは、小さな力やけど、日本人を理解してるひとりの優秀なハンガリー人を育てたい。しかし、ボラージュは、このままでは必ずハンガリーに帰ってから失敗する。ぼくは機会を見て、徹底的に、ボラージュの人間を鍛えるつもりや』。晋太郎が、わしにそない言うたのは、その日だけやあらへんで。言い方は違うても、おんなじ意味のことを何べんもわしに言いよった」

その晋太郎が言ったという言葉は、敦子には初耳で、しかも気味が悪いくらい明晰な福造の話方に驚いた。

「おじいちゃん、大丈夫やわ」

「何がや」

「おじいちゃんは、老人性痴呆症にはかかってないわ」

「当たり前や。わしの頭は冴えすぎて、自分でも怖いくらいや」

フックが、壁に取り付けてある冷房機を見あげて鼻を鳴らした。フックは、そこから冷たい風が噴き出ることを知っているのである。

「やかましい。贅^{ぜいたく}沢な犬や。夏はまだ始まったとこやないか。いまごろからクーラーを入れてたら、もっと暑なつたらどないする気や。ほんまに、お前っちゅう犬は、暑さ寒さに弱い犬や」

福造に叱^{しか}られ、フックは不服そうに敦子を見やった。そのフックの目やにを取ってやってから、敦子は、きょうが土曜日であることを思い出した。家を出て、ひとりで生活するようになった幸一と真由美は、いつのまにか、土曜日には家に帰ってくるようになっていた。そして、泊まって日曜日の午後にまた出て行く。いったい、どんな心境の変化か、それはことしの一月からつづいているのだった。けれども、自活するようになると、物入りも増えて、幸一も真由美も、生活費を敦子に渡すことはなくなり、それが家計を相当苦しくさせていた。ボラージュの授業料や定期券代や本代は、一年を通すと、かなりの額にのぼった。

敦子は、以前から気にかけていることを、この際、福造に質問してみようかと思った。夫の晋太郎にも相談したのだが、晋太郎は、

「心配せんでもええ」

とだけしか答えてくれないのである。

「恭太のことやけど……」